

令和5年度 地域のチカラ協働事業及び 市民協働モデル事業 取組報告書

鹿沼市 市民部 協働のまちづくり課

目次

はじめに	1
掲載取組一覧	2
1 地域のチカラ協働事業	
(1)西大芦地区自治会協議会	4
(2)加蘇地区コミュニティ推進協議会	5
(3)南押原地区コミュニティ推進協議会	6
(4)東大芦地区コミュニティ推進協議会	7
(5)栗野地区コミュニティ推進協議会	8
(6)清洲地区コミュニティ推進協議会	9
(7)花と芸術の街・あわの実行委員会	10
2 市民協働モデル事業	
(1)磯 GO!みらいの会	11

はじめに

市では、第8次鹿沼市総合計画において「協働・共創」をまちづくりの大きな方向性として定めました。自治会等の地縁団体を対象とした「地域のチカラ協働事業」や市民活動団体を対象とした「市民協働モデル事業」といった補助事業により、協働・共創のまちづくりの主体となる皆さんを支援しております。

今年度も両補助事業の活用により、様々な取組が行われましたので、皆さんのまちづくり活動の参考となる事例集になればとの思いから、この報告書をまとめました。

地域のチカラ協働事業

目的

助け合う地域、住み続けたい地域、訪れたい地域の共創のため、住民の皆さんが主体的に取り組む、持続可能で自立化を目指す公益上必要な事業を、人的、財政的に支援するものです。

補助対象者

地区自治会協議会または、地区コミュニティ推進協議会など

補助対象事業

運営組織基盤の強化、持続可能な収支計画、市民活動団体や企業等との協働推進の3つの視点が盛り込まれた防犯、防災、福祉、コミュニティビジネスなど

市民協働モデル事業

目的

市民と市が協働で地域の課題解決にあたり、市民自治と協働によるまちづくりの推進を図ることを目的とします。

補助対象者

市民活動団体等（5名以上の構成員（うち過半数は鹿沼市民）とする）

補助対象事業

鹿沼市のまちづくり・地域づくりの推進を図る公益的な事業

掲載取組一覧

Ⅰ 地域のチカラ協働事業の取組

(1) 西大芦地区自治会協議会

- ・事業名：宅配弁当事業

概要：自前で食事の確保が難しい住民への弁当宅配及び見守り活動の実施。

- ・事業名：農産物市事業

概要：地域住民に買い物場を提供し、併せて地区外からの誘客を図る。

(2) 加蘇地区コミュニティ推進協議会

- ・事業名：地域防災力の強化

概要：防災マップの作成と各戸配布及び、防災研修会・講演会の開催。

(3) 南押原地区コミュニティ推進協議会

- ・事業名：南押原地区友遊館事業

概要：幼児・子ども・高齢者サロン・健康麻雀教室・ゆうゆう食堂・ギャラリー等12事業。

(4) 東大芦地区コミュニティ推進協議会

- ・事業名：地域交流を生かした健康のまちづくり

概要：防風カーテンを芦の郷公園に設置することで地域交流拠点を充実。

- ・事業名：災害に強い地域づくり

概要：住民に防災意識を定着させるため、研修や講座を開催するほか、イベント性をもたせた防災訓練等を実施。

(5) 栗野地区コミュニティ推進協議会

- ・事業名：防災事業

概要：防災マップの作成、配布及び、楽しみながら防災意識を高められるイベントの開催。

(6) 清洲地区コミュニティ推進協議会

- ・事業名：環境にやさしいまちづくり

概 要：資源物回収拠点の整備、学校と合同で資源物回収、環境学習講話。

- ・事業名：災害に強いまちづくり

概 要：防災マップの作成と配付、防災意識醸成や知識習得のため講演会を実施。

- ・事業名：安全で安心なまちづくり

概 要：防犯カメラ設置やパトロールの実施、防犯意識を高めるため講演会を実施。

(7) 花と芸術の街・あわの実行委員会

- ・事業名：AWANO 夢咲く ART FESTIVAL

概 要：芸術イベント「AWANO 夢咲く ART FESTIVAL」の開催

2 市民協働モデル事業の取組

(1) 磯 GO!みらいの会

- ・事業名：イソマチマルシェ

概 要：地域の魅力を高め、様々な人たちと交流することを目的に定期的にマルシェを開催し地域を活性化。

令和5年度 地域のちが協働事業取組レポート

事業名

宅配弁当事業
農産物市事業

地区名

西大芦地区

西大芦地区自治会協議会

代表者肩書・氏名

会長 上澤 利行

●事業の目的、目指す将来像など

基幹産業である農林業の衰退とともに地区人口が減少しており、高齢化が他地区と比較して加速的に進行している。また地区内唯一の学校である西大芦小学校が閉校し、地域コミュニティの活力が益々低下していくのではないかと懸念されている。

このようなことから、定住促進、交流人口・関係人口の増加により地域の担い手が確保され、コミュニティ活動の維持、活性化が図られること、及び地域住民、特に高齢者などが生活必需品や食事の確保に困らないことを事業の目的、及び目指す将来像として活動している。

●今年度の事業の取組実績

●宅配弁当事業

・廃校となった旧西大芦小学校の給食調理室を活用し、毎週木曜日に弁当を作り、自前で食事の確保が難しい地区住民や地区外の方、事業所等にスタッフが手渡しで配達したほか、イベント関連の弁当や農産物市への出店などに力を入れた。

・弁当配達時には、高齢者世帯等への見守り活動も行った。会話を通して利用者の近況を知り、見守り活動に役立てるほか、不審者や詐欺まがいの電話等の情報を得たときは、注意喚起も行った。

●農産物市事業

・自力で地区外まで買い物に行くことができない住民に買い物の場を提供することや、地区外からの誘客を図るため、毎月第3日曜日に農産物市を開催した。

・さらなる充実のため、利用者アンケートを行い、その結果を踏まえた企画立案を行ったほか、地区のイベントを農産物市に合わせて開催するなど誘客を図る工夫を凝らした。

・4周年祭や感謝祭は、地区外の方にも出店を募り、大々的に開催した。

●今後に向けての展望、意気込み

●宅配弁当事業

・事業の継続性を高めるため、イベント関連の弁当や事業所等への弁当受注、農産物市への出店などの収益確保に向けた取組を強化していく。

・地区内で増加傾向にある自前で食事確保が難しく、見守りが必要な高齢者に対し、ていねいに説明をしていきたい。

・メニューの開発・研究やスタッフ研修にも力を入れ、高品質で利用者に満足してもらえるような弁当作りを目指して、日々精進していきたい。

●農産物市事業

・魅力向上のため、地区の特性や強みを前面に出した展開や地区内の別のイベントと連動した誘客などに取り組み、地区外や新規の出店者の増加につなげる。

・スタッフの高齢化が進み担い手確保の必要があることから、交流人口・関係人口を増やし、農産物市の手伝いをしやすい環境を醸成していく。最終的には、主体的に運営に関わる人材を発掘していく。



宅配弁当事業



農産物市事業

令和5年度
地域のちが協働事業取組レポート

事業名

地域防災力の強化

地区名

加蘇地区

加蘇地区コミュニティ推進協議会

代表者肩書・氏名

会長 小林 俊明

●事業の目的、目指す将来像など

若者世代の定住化により地域の担い手が確保され、コミュニティの活動が活性化されている姿。また、地域活動により防災意識が向上し、高齢者などの把握が出来ており、地域全体で命と財産を守る取り組みを目指す。また、加蘇地区ふるさとづくり協議会を中心とし、都市交流により地区内への移住の促進や関係人口が増加することで、地域の担い手が確保されている姿を目指す。

●今年度の事業の取組実績

令和元年の台風19号の被害を受け、令和2年度から危険箇所の把握、現場確認内容を整理し、令和4年度に加蘇地区防災マップ作成し全戸配布を実施。今年度は、避難所の防災物品や鍵の確認、清掃を実施、防災意識の向上を図った。

4年ぶりの開催となる加蘇地区敬老会において、地域防災についての心構えについて自治会協議会長が実施し、防災の際の対応の方法を伝え、災害を自分のこととして感じる内容を高齢者向けに防災講話として実施。

また、自治会長・消防団・地区内防災士・民生委員・小中学校PTAなど各団体の代表メンバーにより防災研修を実施。能登半島地震での孤立集落の状況を確認し、高齢者などの支援体制を想定した地図上の訓練を実施、連絡体制や情報共有の強化を図った。

●今後に向けての展望、意気込み

防災マップを活用しながら、研修会や避難訓練を開催して、地域防災力の底上げ、防災意識の向上を継続的に図りたいと考えており、毎年継続して実施してまいりたいと考えております。

また、研修会や避難訓練の実施の際には、幅広い方の参加を検討してまいります。特に、加蘇地区コミュニティ推進協議会メンバーには、関連団体であります加蘇地区ふるさとづくり協議会、加蘇地区青少年育成市民会議、加蘇地区福祉活動推進協議会、加蘇地区学校運営協議会、消防団、加園小、加蘇中、PTA、育成会などの代表が参加しており、また、消防団や民生委員、地区内防災士など地域ぐるみで連携を密にして情報共有を図りながら継続実施してまいりたいと考えております。



加蘇地区敬老会での防災講話



加蘇地区防災研修会

令和5年度
地域のちが協働事業取組レポート

事業名

南押原地区友遊館事業

地区名

南押原地区

南押原地区コミュニティ推進協議会

代表者肩書・氏名

会長 鈴木 節也

●事業の目的、目指す将来像など

年々、人口減少が進む中、地域が存続していけるのは、老若男女が互いに支え合い助け合って生き、地域の良さ(人的・地域環境)を知ることにある。

安全で安心な生活が保障されれば「お互い様の精神」も醸成され、地域が一体化する。

そのためには、地域住民の活動の拠点である「友遊館」を更に発展・充実させる必要がある。また、企業との協力・スタッフの参加意欲・若年層の地域への目の向け方等が不可欠である。これらを目指す将来像として捉え、日々精進していきたい。

●今年度の事業の取組実績

友遊館は、福祉的事業として、各種サロン(幼児、子ども、高齢者)、学習教室、健康マージャン、ゆうゆう食堂、博物館、ギャラリーの8事業と、それを支える4事業(農産物販売、カフェ、貸自転車、駄菓子屋)を展開している。更に、令和6年度には隔年開催の「おたがい様市」を実施予定である。

毎月第1水曜日は全事業を同時展開し、多世代間交流を図っている。

令和3・4年度はコロナ禍により実施が制限されたが、5年度は8月を除いて実施し、3,500人の参加が見られた。

カフェは月4回開いているが、高齢者の利用だけでなく、30代から60代の一般住民の利用も増えており、利用者とスタッフ間の交流の場ともなっている。

子どもサロンでは、月4回のサロン以外にクリスマス会を開き、学童保育の子どもも先生と一緒に参加し、学童保育に参加していない子どもとの交流が図れるなど工夫がされている。

●今後に向けての展望、意気込み

予算的な面で安定しないと事業展開は充実しない。そこで、今までの協力企業の他に地域内で経営している事業体との連携を始めている。また、若者達が地域おこしのために組織を結成し、年6～8回マルシェを開いているので、その団体とコラボして、連携を深めていく。

友遊館は設立7年目になるが、まだ、地域内に十分な浸透が図られていない。そこで、友遊館の理解度を深めていくための、広報班を新たに設ける方向で検討している。

今までは、スタッフの年齢に合った利用者が多かったが、多世代間交流には年齢のバランスが必要である。日曜、祭日には開かれていなかったカフェ等を高校生、大学生に活用してもらい、利用者の年齢層を拡大し、活気をもたらしたいと考えている。

友遊館の目的については、若者の組織体「磯GO!みらいの会」と話を進めている。



友遊館【高齢者サロン】



磯町マルシェ【磯GO!みらいの会】

令和5年度
地域のちが協働事業取組レポート

事業名

- ・地域交流を生かした健康のまちづくり
- ・災害に強い地域づくり

地区名

東大芦地区

東大芦地区コミュニティ推進協議会

代表者肩書・氏名

会長 寄川 良一

●事業の目的、目指す将来像など

地域で高齢化が進み、地域内で「支えられる人」の割合が増え、「支える人」の割合が低下している。また、最近では災害の規模が大きくなってきており、令和元年東日本台風での被害を超えるもっと大きな災害が起こる可能性がある。

そこで、高齢者が元気で居続けることで「支えられる人」が増えず、若い世代が地域にかかわってくれることで「支える人」が増え、お互いが強いきずなでつながり、誰一人取り残されない強い地域が住民主導で作られている将来像を目指す。

●今年度の事業の取組実績

「地域交流を生かした健康のまちづくり」では、コロナウィルス禍で中止となっていた各種イベントを実施した。市防災訓練やふれあいゲートボール大会、ふれあいウォーク等、幅広い世代の地域住民が参加したことで交流が生まれ、一緒に取り組んだことで地域住民の絆が強化された。地域交流の機会を昨年度より増やすことは出来たが、促進を図るまでに至らなかったことが今後の課題である。

「災害に強い地域づくり」では、5月に自主防災についての講演会及び危機管理課による市防災訓練の研修を開催、6月には市防災訓練の最終打合せを実施し、7月の本番に臨んだ。さらに、11月には東大芦地区防災訓練を実施し、新たに福島県語り部派遣事業を取り入れ、東日本大震災を被災者の生の声により伝承してもらった。これらの事業を通して、住民の防災意識を高め、かつ、住民が継続的に参加できる環境の整備に努めた。

●今後に向けての展望、意気込み

「地域交流を生かした健康のまちづくり」では、天候に左右されずかつ開放的である芦の郷公園の特性を活かし健康づくりイベント等を促進し、地域内の健康維持を図っていききたい。そしてイベント等を通じて世代間交流を促進し地域の絆を深め、その絆が強固なものへと変化し、若い世代の地域外への流出が抑制され、地域の若い担い手が増え、運営基盤が整っている将来像へ近づけていきたい。

「災害に強い地域づくり」では、より多くの地域住民に「自主防災」の意識付けを行うこと、さらに継続的に参加できる環境を整備するため、今年度と同様の事業を繰り返し実施して、東大芦地区自主防災協議会の定着とともに住民の防災意識の定着も図っていききたい。そして防災リーダーを育成し、大きな災害が起きても誰一人取り残されない強い地域が住民主導で作られている将来像を目指していきたい。



ふれあいゲートボール大会の様子



市や地区の防災訓練の様子

令和5年度
地域の防災協働事業取組レポート

事業名

防災事業

地区名

栗野地区

栗野地区コミュニティ推進協議会

代表者肩書・氏名

会長・野原 裕

●事業の目的、目指す将来像など

被災直後の対応など多くのノウハウの習得が必要であり、自主防災意識や地域内助け合い意識の高揚を図り、加えて地区住民の若年層をターゲットに自主防災組織内の役割を周知し担ってもらう為にも、防災に関するイベントを開催し、災害の疑似体験や避難所体験を通して有事に備える。

地域において「自分の身は自分で守る」ことを目指すには、近所の要援護者への声掛けや援助できるシステムの構築が必要であり、今後起こりうる災害に対し、危険個所の把握や避難経路の確認を行うために栗野地域版防災マップを作成し各戸配布する。

●今年度の事業の取組実績

「あわの防災フェスタ2024」を令和6年2月18日（日）に開催、栗野地区コミュニティ推進協議会の支援団体や鹿沼市内外の市民団体や防災関連企業の協力参加を得て、楽しみながら防災意識を高めるコンセプトを基に実施。

災害の疑似体験や避難所体験、アルファ化米の試食など工夫を凝らした様々な体験メニューや展示を用意して、小中学生などの若年層に被災直後の対応などを意識した防災教育や栗野地区住民の自主防災意識や地域内助け合い意識の高揚を図った。【協力団体・企業：学生団体Rainbow、NPOさいたま市民キャビネット、陸上自衛隊宇都宮駐屯地、損害保険ジャパン(株)、NTT東日本(株)】

危険個所の把握や避難経路の確認を行うため、令和6年3月末までに栗野地区防災マップを編集・印刷製本、配布を実施。（協力企業：大塚カラー印刷）

●今後に向けての展望、意気込み

自主防災意識や防災知識の習得、地域内助け合い意識の高揚を図るため「あわの防災フェスタ」開催を継続する。アンケートを実施し実施時期等を模索する。

今後も継続して新たな市民団体や防災関連企業の参加協力を市内外問わず働き掛けて、出展ブースの充実を図る。

編集・印刷・配布した「栗野地域版防災マップ」を基に、各家庭で有事の際に最寄りの1次避難所までの避難経路の確認や避難行動等の取り決めをしてもらうよう説明会の開催や周知をする。自治会及び支部単位で自宅から1次避難所までの災害時避難行動の事前訓練や避難所体験などを通して有事に備える。

栗野地区の住民を対象とした1次避難所体験などの訓練を実施して得た情報や教訓を生かし、各自主防災会（口栗野・中栗野・入栗野）が管理する「防災倉庫」装備品の充実や点検、使用方法の訓練を実施する。



防災事業検討会議



防災フェスタ

令和5年度
地域のチカラ協働事業取組レポート

事業名

安全で安心なまちづくり
ー自分たちのまちを自分たちで守るー

地区名

清洲地区

清洲地区コミュニティ推進協議会

代表者肩書・氏名

会長 益子 純夫

●事業の目的、目指す将来像など

この事業は、地区住民から出されたアイデアをもとに計画された。当地区では台風による洪水で大きな被害を受けた。また、宇都宮西中核工業団地や南摩ダム建設の関係で交通量が増加しており、近年、地区を取り巻く環境は大きく変化している。さらには、環境や防犯の面で住民の意識を高めていく必要もあり、これらを踏まえて事業内容の検討を行った。実施にあたっては、自分たちのまちを自分たちで守るために、「環境」「防災」「防犯」の3つの観点から事業を継続して実施し、「住民の安全で安心な暮らしの実現」を目指す。

●今年度の事業の取組実績

◎組織づくり

・本協議会に中に、新たに環境・防災・防犯の部会設け、35名の役員を3部会に分けた。(部会長は3自治会長)

◎実施事業

①環境部会・・・「小学校・地域合同の資源物回収」「環境学習講座(講話とエコキャンドルづくり)」「エコライフ・フェアin清洲(ゴミ拾いウォーキング)」「資源物回収保管庫の設置」

②防災部会・・・「防災マップの作成と配付」「防災講演会(防災意識を高める)」「防災講演会(ハザードマップと防災アプリ)」「災害時の協定の再締結(福祉施設、ゴルフ場、他)」

③防犯部会・・・「防犯パトロール(地区内団体と合同)」「防犯診断(地区内団体と合同)」「防犯講演会(防犯意識を高める)」「防犯カメラの設置」

◎その他

・実施内容の共有と実施後の振り返りを大事にしながら事業を実施した。

●今後に向けての展望、意気込み

令和5年度は地域のチカラ協働事業の実施初年度である。事業名のサブタイトルに「自分たちで」とあるように、実施者である部会メンバーに事業への意識をもってもらうよう、計画から実施、実施後の振り返りの中で配慮した。特に話し合いでは、内容を明確にして進めるようにしたが、メンバーの方からアイデアや改善点等、前向きな意見が多く出され、一人一人の地区への想いと意欲が感じられた。また、事務局であるコミュニティセンター職員の理解と協力が大きな力となった。今後も「共有」と「振り返り」を大事にしていきたい。

今年度は、3部会で多くの事業を実施したが、メンバーから出た「防災マップを配付するが各家庭での活用は」「より多くの住民の方に事業に参加してもらうためには」などの意見は、2年目の「重要な課題」である。さらに協力体制を築きながら、難題にチャレンジしていきたい。



小学校・地域合同資源物回収



環境学習講座(エコキャンドルづくり)

**令和5年度
地域のちが協働事業取組レポート**

事業名

AWANO夢咲くART FESTIVAL
プロジェクト

地区名

栗野4地区合同

花と芸術の街・あわの実行委員会
(粕尾地区コミュニティ推進協議会)

代表者肩書・氏名

会長 神山義一

●事業の目的、目指す将来像など

地域の財産である美しい自然や歴史ある文化財を活かした芸術・文化的活動が身近なものになり、地域住民が心豊かに生活を営み「住んでよかった、住み続けたい」と思える誇りの持てる地域を目指す。

さらに、学校や地域の文化、経済団体との連携を深め、子どもの豊かな感性の育成、地域活性化を視野に入れた活動、また、芸術家が移住し住民を巻き込んで展覧会を開催したり、地域とアートをつなぐ活動をする事で、地元の若者世代が自発的に地域の活性化を考え取り組むような環境や流れをつくり、地域の担い手を育てていく。

●今年度の事業の取組実績

(1) AWANO夢咲くART FESTIVALの開催

11月5日～18日に、栗野地域5会場（栗野中、旧栗野中、医王寺、常楽寺、そば処嵯峨の庭園）で作家11名による絵画、彫刻等の展覧会を開催した。来場者は、延べ3,134人であった。

会期中には、音楽会、演劇、和太鼓の演奏などのアートステージ、地域住民を対象としたワークショップや栗野中学校での鑑賞授業を実施した。

また、地域店舗の協力を得て、マルシェの実施やお菓子の商品開発を行い展示会場で販売した。その他、作家の小作品を蔵のギャラリーで展示販売もした。

さらに、今年度より展覧会場の入場を有料とし596人の購入があった。

(2) 道祖神プロジェクトの実施

昨年度の実行委員会での双体道祖神の視察研修や粕尾小学校での学習会の実績を踏まえ、栗野中美術部による「道祖神のコマ撮りアニメーションづくり」を実施した。

●今後に向けての展望、意気込み

(1) AWANO夢咲くART FESTIVALを“きっかけ”とした地域の活性化

アートフェスティバルでは、作家の公募を視野に入れ、栗野地域5会場での展覧会の充実を図る。また、地域作家の展示を行い、アートが地域の方に身近なものになり、心豊かな生活を送るきっかけとなるような存在にしたい。

また、マルシェの実施や地域の方が参加しやすい活動を検討し、フェスティバルにより多く参加してもらい、地域活性化に積極的に取り組む人材を育てていきたい。

さらに、栗野地域内外の他の活動、イベントとの連携を図る。

(2) 空き家を活用した芸術活動

芸術家の移住促進を図り、地域の方と交流しながら活動することで地域の賑わいをつくっていく。

(3) 道祖神プロジェクトの継続

双体道祖神を中心とした地域文化財の学習を続けながら、伝統文化の継承やアートとしての新しい道祖神の制作を進め、各地区への設置を検討する。

(4) 自主運営に向けての自主財源の確保を目指す。

(5) 持続可能性を高めるため、法人格を有する活動団体への変更を検討する。



旧栗野中学校展示



栗野中学校鑑賞授業

令和5年度 市民協働モデル事業取組レポート

事業名

イソマチマルシェ

団体名

磯GO!みらいの会

代表者肩書・氏名

会長:鈴木節也

副会長:鈴木陽・梁島由梨

●事業の目的、目指す将来像など

地域の人口減少化に伴ない人間関係の希薄化が心配される地域。住民が一体化を図り、結束して地域を盛り上げることが必要。そこで、事の重大さを感じた若者が立ち上がり「磯go!みらいの会」を結成。イベントを行い磯町の良さをPRする。更に地域を特色のあるまちにしよう、そのために空き部屋を活用し、そこに芸術家に来てもらい「芸術のまち磯」を創り出し、人口減少をくい止めようと考えている。最終的には、農村地帯ではあるが、一人ひとりが合間をみて、陶器・彫刻・絵等を作成することが趣味としてもてらるような地域人を作る。

●今年度の事業の取組実績

「磯go!みらいの会」では、1月から12月までを1年と考え事業を実施している。その1としてのイベント事業であるが、地域の特産物である「イチゴ」を磯町としてブランド化していく。そのためにイチゴ農家の人と話し合いのもと1〜3月まで販売している。その他、高齢者が庭先で作った農作物の新鮮さを前面に出し、また、米も品種そのもの100%で販売、うまさを引き出していく。その他、多世代間が交流でき、人間関係を密にする目的でキッチンカーにも会員になってもらい、毎回10台以上の出店を見ている。6月は、磯山神社とのコラボで双方の利を考え実施、10月は休耕田を利用し、コスモス畑をつくり、誘客を図っている。空き家も2軒、芸術家が利用することで話が進んでいる。地域が発展するには、人的なことばかりでなく、物的な面の環境整備も同時に進行していくよう心がけている。

●今後に向けての展望、意気込み

イソマチマルシェは、他地域から参加者が増しているが、スタッフとしても一緒に手伝ってくれる人も増している。他地域の若者との交流の増加と地域内の地縁団体との交流も図り、地域の一体化を考えている。特に、自治会の行事には連携して互いに理解度を深め運営することは継続性が期待できる。イチゴの磯町ブランド化もイチゴ農家との話し合いが行われているので、令和7年度にはパッケージまで作成できるようにしたい。高齢者の生きがいとなる農産物の栽培を手助けできるよう販売力にも工夫をこらしていき、老若男女が1つのことに支え合い、助け合える福祉の心を育てるきっかけとなればと思っている。このことは、地域の防災力にも係わることでもある。また、地域全体が芸術のまちといわれるような一人ひとりが趣味を生かせる環境づくりにも努力していきたい。磯町が長く存続することに期待して。



マルシェの様子



マルシェの様子